

小 沢 康 彦

今日、Charles Lamb (1775-1834) の名によつて、通常想起されて来るものは、柔和で物静かな、やゝ脆弱で、どこか寂しさの漂う、英国の代表的随筆家といわれる人物の姿である。それは、ふさしく、「世を避けた人々の代表者」(the prince of escapists⁽¹⁾) と呼ばれるのにふさわしく感じられる。そして、彼が

The fluctuations of fortune in fiction — and almost in real life — have ceased to interest, or operate but dully upon me. Out-of-the-way humours and opinions — heads with some diverting twist in them — the oddities of authorship, please me most.⁽²⁾

(小説に於ける運命の移り変りは — 実生活に於いても殆んどそうなのだが — もはや興味を惹く事はなく、それ程でない場合でも、鈍くしか働きかけて来ない。風変わりな気分や意見 — 人を樂しませる癖のある頭の働き — 奇妙な書き振り、そうしたものが私を最も喜ばせる。)

と記しているのを読み、又何事も割り切つて考えようとする息抜きのない「頑くなな時代」(our age of seriousness⁽³⁾) に不満を述べているのを聞く時、そうした印象を一層深くする。しかし、彼は、果してそのような世を離れた諦観の人なのであるか。かつて我が国や中国に存在した隠棲者を見るのと共通の眼をもつて、彼を見極め様とする事は、その人間像をより正しく把える事に役立つであろうか。そうした見方を妥当なものとするには、彼には餘りにも切実な「生活」が、換言すれば「現実」があつたのである。

今日迄の Lamb に対する評価の主流は、生涯の友 Coleridge が彼に与え、それを彼自身は厭わしく思つた所の epithet, 'Gentle-hearted Charles' を基底とし、Alfred Ainger の 'the man, Charles Lamb, an egotist without a touch of vanity or self-assertion⁽⁴⁾' とする見方に支えられた、'humour' と 'pathos' に包まれた 'humanity' に満ちた文学、という事にあつた。確かにそれは彼の一面、既に完成された essayist としての Lamb の説明となるであろうが、それに達する迄の過程、Lamb をして秀れた essayist たらしめたものに対する十分な説明とはなつていないと思われる。そして Walter Pater が、beneath

this blithe surface there was something of the fateful domestic horror, of the beautiful heroism and devotedness too, of old Greek tragedy⁽⁵⁾ と述べる時、そこには、そうした 'tragedy' を耐え抜いた人間の頑強さ、人生への烈しい意志の力に対する配慮が必要であつたと思われる。彼の所謂 mystification の技巧の下に、'the exclusive and all devouring drama of common life⁽⁶⁾' を懸命に生きている Lamb のそうした強固さを窺う事は、彼の文学そして人間を作り上げたものを明らかにする事になると思われる。それは例えば、'The South-Sea House' の中で、かつての同僚の一人で、歌の好きだつた人物の思い出を語り

But at the desk Tipp was quite another sort of creature. Thence all ideas, that were purely ornamental, were banished. You could not speak of anything ro-

mantic without rebuke. Politics were excluded. A newspaper was thought too refined and abstracted. The whole duty of a man consisted in writing off dividend warrants⁽⁷⁾

(しかし、机に向うとテイツプは全く別の人間となる。その時から、純粹に裝飾的なあらゆる考えは追出されてしまう。何事につけロマンティックな事を口にすると叱られる。政治は除外され、新聞は餘りにも上品で抽象的であると考えられた。人間の本分は、配当の証明書を書き送る事にあつた。)と述べ、更に“ He is the true actor, who, whether his part be a prince or a peasant, must act it with like intensity ”⁽⁸⁾ と言葉を続けているのを聞く時、そうした personality への希求の念が、現実を生きて行く Lamb の心の中にあつた事は、‘ the rigour of the game ’⁽⁹⁾ に沈潜する Battle 夫人に対する彼の叙述の中からも窺う事が出来る。

Lamb は貧しい家庭に育ち、物質的なものの大切さを十分に知つていた。それ故それを充足させる場としての現実を着実に生活して行つた。彼をして、その ‘ toils ’⁽¹⁰⁾ を負いながら、‘ I had grown to my desk, as it were; and the wood had entered into my soul. ’⁽¹¹⁾ と述べる迄に耐え抜かせたものは、貧困の悲惨さへの忌避の念⁽¹²⁾ と彼の人間としての不撓の強さであると思われる。彼の人生は、さまざまな苦難を負つた力強い個性の選ぶ自然な忍耐の生き方であつた。それ故彼は「新奇なもの」(novelties⁽¹³⁾)にはとまどいを感じる反面、「常識」を実生活に於いては尊重した。彼は、兄 John の肖像を描きながら次の様に云う。

With always some fire-new project in his brain, J.E. is the systematic opponent of innovation and crier down of everything

that has not stood the test of age and experiment. With a hundred fine notions chasing one another hourly in his fancy, he is startled at the least approach to the romantic in others; and, determined by his own sense in everything, commends you to the guidance of common sense on all occasions. — With a touch of the eccentric in all which he does, or says, he is only anxious that you should not commit yourself by doing anything absurd or singular.⁽¹⁴⁾

(常に頭の中に何か新しい計画を持ちながら、彼は新奇なものにはきまつて反対し、そして時と試みを経ないあらゆるものをけなした。空想の中で刻々に百を数えるすばらしい考えが追掛けつこをしているのに、他人に少しでもロマンティックな萌しが見えると非常に驚き、すべての事を自身の感覚で決定しながら、他人にはあらゆる場合に常識に従う様に薦める。自分が行つたり云つたりするすべてにどこか風変わりな所がありながら、他人が愚かな事や奇妙な事をして名誉を危くしない様に心配しているのである。)

こうして、世の流れと共に歩みながら、Lamb は家庭の悲劇と生活の重荷に耐えて、確実に日々を送つて行つた。しかし、たゞそれだけの生活であつたなら、彼の人間性は ‘ many a heavy hour of life ’⁽¹⁵⁾ に打ひしがれてしまつた事であろう。彼をしてその生活を続かせ得たものは、さまざまな方法による「息抜き」(relief)⁽¹⁶⁾、‘ toils ’からの解放の手段の存在であつた。彼は云う

I confess for myself that (with no great delinquencies to answer for) I am glad for a season to take an airing beyond

the diocese of the strict conscience, — not to live always in the precincts of the law-courts — but now and then, for a dream-while or so, to imagine a world with no meddling restrictions — to get into recesses, whither the hunter cannot follow me... I come back to my cage and my restraint the fresher and more healthy for it. I wear my shackles more contentedly for having respired the breath of an imaginary freedom⁽¹⁷⁾.

(私個人としてあからさまに述べるなら、(それが責任を負う程に大きな過失でない限り)私は暫らくの間厳格な良心の力の及ばぬ所で息抜きをし — 法廷の管轄内に常に居るのではなくして、時々夢見の間だけでも煩わしいおせつかいの無い世界を想像し — 道徳などといった世塵の及ばない隠れ家に入つていたい。... そうすればその為に一層生々とし元気になつて、現実という捕われの檻の中に、又束縛の中に戻つて来よう。想像の自由の空気を呼吸した為、より満足して拘束に服しよう。)

ここに見られる彼の考え、即ち「現実」をより良く生きる為の「現実よりの離間」、換言すれば、「息抜き」の必要の主張は、会社員としての昼の生活と文筆家としての夜の生活を統一し、彼にまつわるあらゆる困難を克服する為、彼自身が体得した「生き続ける」為の生活の智慧であり、彼の思考形式そして生き方を支える基本原理であつた。それ故、彼にとつては、あく迄現実の生活が最も重要なものであり、それを充実して生きる為こそ「息抜き」の意義が認められて来るのである。従つて「息抜き」の場所、即ち現実をより良く生きる為の力を新たに養う場所は、現実から全く隔絶された深山幽谷などではなく、

して、「虚飾のない日常生活のひびきのそのまゝの集り」(the unpretending assemblage of honest, common-life sounds⁽¹⁸⁾)の中に見出されるのも当然の事であらう。

そうした「日常生活のひびき」の中で、わけても人の訪れを象徴する「戸をたたく者」(*Knock at the door*⁽¹⁹⁾)を好んだ彼は、クウエイカー教徒の集会について次の様に述べる。

Reader, would'st thou know what true peace and quiet mean; would'st thou find a refuge from the noises and clamours of the multitude; would'st thou enjoy at once solitude and society; wouldst thou possess the depth of thine own spirit in stillness, without being shut out from the consolatory faces of thy species; would'st thou be alone, and yet accompanied; solitary, yet not desolate; singular; yet not without some to keep thee in countenance; — a unit in aggregate; a simple in composite: — come with me into a Quakers' Meeting.⁽²⁰⁾

(誘者よ、もしあなたが本当の平和と静かさがどの様なものか知りたく思うならば、群衆の騒しさから逃れて安息の場所を得たいと思うならば、孤独を保ちながら同時に人と同席したいと思うならば、人間の顔を見る事によつて得る慰めから隔絶されずに静寂の中に心の深さを究めたいと思うならば、ひとりであつてしかも人と共に居たいならば、単独でありながら見捨てられているのではなく、一人で居て尚あなたに落着きを与える何人かの人が一緒に居り、集合の中の一単位、複合体の中の単体でありたいと思うならば — クウエイカー教徒の集

会に私と一緒にいらつしやい。)

ここでは、彼が「日常生活のひびき」の伝つて来る所に、その「現実よりの離間」の場所即ち「息抜き」の場所を求めなければならなかつた理由を、明らかに認める事が出来る。彼は人の顔に慰めを与えられ安心を得た。「ひとりであつてしかも人と共に居たい」と願う程に人間的なひとつの比類なき個性にとつては、それ故にこそ、たとえ彼にとつて現実が如何に厳しいものであつても、人間の生活するその現実から完全に逃避する事は出来なかつたのである。

彼の「息抜き」の場所は、地理的にはLondonそしてHertfordshireに殆んど限られていた。空間に於いて、この様に限定された環境の中に居た彼の「息抜き」の手段は、必然的に想像の世界へ、回想的な時間の領域へと求められて行く。文筆も又その為のものであつた。彼は云う、

The enfranchised quill, that has plodded all the morning among the cart-rucks of figures and cyphers, frisks and curvets so at its ease over the flowery carpet-ground of a midnight dissertation.— It feels its promotion.⁽²²⁾

(午前中、数字や零の記号で混み合つた荷馬車の間を苦勞して来た筆は、今や解放されて、夜半の書き物の花模様の毛氈の上を気楽に跳びまわる——出世でもしたかのような感じである。)

Lambにとつて、「書く」事は現実をより良く生きる為のrecreationであつた。そうである様に、彼は同時的存在である「現実」からより隔たつたものへ題材を求め、表現に於いては、独特な手法を案出した。彼の懐古的傾向とかhumourといわれるものは、これ等の所産である。しかし、当然の事ながら、この「息抜き」の世界への「現実」の投影を全く遮る事は不可能であつた。私達は、彼の

あるがまゝの姿を、これ等の書き物を通して、十分に窺う事が出来る。それ等を不朽たらしめているものの主要な要素の一つは、こうした影の織りなす何時の時代に於いても変らぬ人間性のこまやかな表われと、生きる事の喜びと意義との啓示にあると思われる。

かくして、冷然たる世間⁽²³⁾にあつて、toil-some lives⁽²⁴⁾のひとつを生きながら、じつとそれに耐え、身にそぐわぬbusinessにも適応して⁽²⁵⁾、遂には'unhealthy contributor to my weal, stern fosterer of my living, farewell! In thee remain, and not in the obscure collection of some wandering bookseller, my "works!"⁽²⁶⁾と感慨を籠めて述べ得る迄に強く生き抜き、物質的な価値を正しく認めながら決して貧しさに怯まず⁽²⁷⁾、そうした現実からの「息抜き」(relief)の世界にあつては、過去の中に没入しつつ現在をより良く生きる力を養い⁽²⁸⁾、生への強い意志に支えられ、「息抜き」の効用に保たれつつ、人間としてLambは更に成長し、円熟して行つた。時と共に、家庭の悲劇の影の揺曳も薄れ、物質的環境も和らいで、彼の心にも安らぎが生まれて来た。がその時には、死が彼の意識の中に、その輪郭を次第に明らかにさせつつあつたのである。

I care not to be carried with the tide, that smoothly bears human life to eternity; and reluctant at the inevitable course of destiny. I am in love with this green earth; the face of town and country; the unspeakable rural solitudes, and the sweet security of streets. I would set up my tabernacle here. I am content to stand still at the age to which I am arrived; I, and my friends to be no younger, no richer, no handsomer. .

I do not want to be weaned by age; or drop, like mellow fruit, as they say, into the grave.⁽²⁹⁾

(私はこの世を来世へとよどみなく運んで行く潮に押流されて行きたくはない。避ける事の出来ない運命の歩みを嫌う。私はこの緑の大地が好きだ。町並と田舎の表情、表現し難い田園の静寂、町の通りの安全な楽しさが好きだ。私はここに暫の住居を建てたい。私は今達している年令のままでいる事に満足する。私も私の友人達も、若くもならず、金持にもならず、より整つた顔立ちになるのでもなく、このままで居たいと思う。私は老令によつて、そうした生の喜びから引離されたくはない。良く云われる様に、熟した果実の様に墓の中へ落ちて行きたくはない。)

そして彼が同じ心をもつて

I would scarce now have any of those untoward accidents and events of my life reversed. I would no more alter them than the incidents of some well-contrived novel.⁽³⁰⁾

(私の生涯の心にそぐわぬ不慮の出来事も事件も、今となつては、それとは逆のものであつて欲しかつたとは殆んど思わない。良く構成された小説の中の事件と同じ様にそれらを変えたくはない。)

と述べる時、それは、既に見て来た様な過程を経て彼が到達した人間としての究極の境地であり、又 essayist としての彼の真髄であり、彼の文学の根底を支えるものであつた。彼は過ぎて来し彼の人生を、一つの作品の様に看做しているかの如くであり、'Lamb's vocation was his life'⁽³¹⁾ という批評はその意味に於いて、正鵠を射ている。

こうした境地に到達する迄の彼は、現実に対して細心であり、生活に於いては慎重であつた。世を処するに常識を重んじ、大勢と共にあつて表面には出ず、人と争う事を避けた。

人間としてもつと奔放でありたかつたであろうが、生きて行く為に彼はそうしなければならなかつた。鬱積するものをさまざまな「息抜き」の方法の中に昇華させながら。それ故彼は思いのままに行動する人、常識の枠に囚われず伸々と生活する人を憧憬した。人間の二種族の中、'the men who borrow' の 'the open, trusting, generous manner'⁽³²⁾ を、彼は親しみをもつて見守つている。そして又次の様に語る。

When a child, with child-like apprehensions, that dived not below the surface of the matter I read those *Parables*—not guessing at their involved wisdom — I had more yearnings towards that simple architect, that built his house upon the sand, than I entertained for his more cautious neighbour; I grudged at the hard censure pronounced upon the quiet soul that kept his talent; and — prizing their simplicity beyond the more provident, and, to my apprehension somewhat unfeminine wariness of their competitors — I felt a kindness, that almost amounted to a *tendre*, for those five thoughtless virgins.⁽³³⁾

(もの事の表面より下には入り込めない子供らしい理解力を持つた幼い時、私は聖書の譬話をその中に含まれた智慧も分らずに読んだが、私は用心深い隣人に対してよりも、砂の上に自分の家を建てたあの愚かな建築家に対してより慕わしい気持を抱いた。自分に与えられた一ミナの貨幣を大切に持つていたあの慎ましやかな人物に加えられた厳しい非難に対して非常に不満であつた。又、その競争者達のずつと用意の調つた、そして私の考えでは、幾分女性らしくない

注意深さより以上に、その純真さを尊んで、あの五人の軽卒な女性に対して殆んど愛の心に到る程の親しい気持を感じたのであつた。)

'Child-like apprehensions'こそ、人の世の便宜的なものや安易な妥協に害われな純粋に人間的な存在の象徴であつた。そうした本源の世界でLambは、本当の愚かさの持つ真の賢明さ、人間的な豊かさと、小さな利口さの持つ人間性の浅さとを指摘する。そして現実にあつては、彼自身も幾許かの小さな利口さを持たなければならない。

in sober verity I will confess a truth to thee, reader. I love a Fool - as naturally, as if I were of kith and kin to him⁽³⁴⁾.

(読者よ、真面目に私は本当の事を告白しよう。私は「馬鹿」が大好きだ。あたかもその親戚知人であるかの様に、生来そうなのです。)

LambはFoolを愛した。世の功利を求めぬ真のFoolには、人間性の豊かな開花がある。日々の'toils'の中に、ともすれば見失ひ勝ちな人間性を求めて、彼は生き続けた。だが、そうしたFoolは、この世には存在し難いものである。現実には

I have never made an acquaintance since, that lasted; or a friendship, that answered; with any that had not some tincture of the absurd in their characters. I venerate an honest obliquity of understanding⁽³⁵⁾.

(私はその後、その性格に少々馬鹿げた所のない人とは、長く続く知合いにも、緩われる事の多い友人にもなり得なかつた。私は理解力が素朴に全うでないのを尊敬する)といつた程度で止まらなければならない。人はこの世にある限り、自己を完全に解放し、他の人々を感じる必要もなく伸々と自由な想像の羽を拡げる事は不可能である。Lambは人

間に強く惹かれながら、同時に才気片片たる現実を生きなければならなかつた。物質と常識に包まれて時流に流されて行かねばならなかつたLambの、それは人間性回復への願いを籠めた、この世にあつては叶わぬ果しなき悲願であつた。

Notes

- (1) Malcolm Elwin, *The Essays of Elia* (Macdonald 1952) introd. P. XXIX
- (2) *Mackery End, in Hertfordshire, Essays of Elia, Last Essays of Elia* (Everyman's Library 1954 (first pub. 1823) 以下頁数はこの版による) P. 88
- (3) *On the Artificial Comedy of the Last Century* P. 170
- (4) Alfred Ainger, *Charles Lamb* (English Men of Letters 1932 (first ed. 1882)) P. 123
- (5) Walter Pater, *Appreciations* (Macmillan 1922 (first ed. 1889)) P. 107
- (6) *On the Artificial Comedy of the Last Century* P. 165
- (7) *The South-Sea House* P. 5
- (8) *ibid.* P. 6
- (9) *Mrs. Battle's Opinions on Whist* P. 38
- (10) *The Superannuated Man* P. 230
'my toils for six and thirty years'
- (11) *ibid.* P. 227
- (12) 「貧困」が如何に厭わしいものであるかについては *Poor Relations* PP. 184-5. 又、人間性を如何に喪失させるかは *Popular Fallacies XII That home is home though it is never so homely* PP. 314-5に最も良く述べられている。
- (13) *New Year's Eve* P. 32

- (14) *My Relations* PP.83-84
- (15) *To the Shade of Elliston* P.196
- (16) その主なものは、回想に耽る事(彼自身 *New Year's Eve* P.33 に於いて、その原因を考え様としている)、芝居(観劇は 'to escape from the pressure of reality' *On the Artificial Comedy of the Last Century* P.166 その為に行くと述べている)、Hertfordshire に於ける逍遙(*Mackery End, in Hertfordshire* に詳しい)、飲酒('It is to a very different description of persons I speak. It is to the weak, the nervous; to those who feel the want of some artificial aid to raise their spirits in society to what is no more than the ordinary pitch of all around them without it. This is the secret of our drinking.' *Confessions of a Drunkard* P.294) 喫煙(*ibid.* P.296) 等であつた。いずれも他の人々との「かかずらい」のない、孤独の中になし得る relief であつた。
- (17) *On the Artificial Comedy of the Last Century* P.166
- (18) 彼にとつて、clerk としての business が 'main occupation' であり、文筆は 'supplementary livelihood, that supplied us in every want beyond mere bread and cheese' (*Newspapers Thirty-Five Years Ago* PP. 258-9) であつた。
- (19) *A Chapter on Ears* P.46
- (20) *Valentine's Day* P.66
- (21) *A Quakers' Meeting* PP.52-3
- (22) *Oxford in the Vacation* P.9
- (23) *Valentine's Day* P.67 'the world meets nobody half-way'
- (24) *On the Artificial Comedy of the*

Last Century P.166

- (25) *Confessions of a Drunkard* P.299
'Business, which, though never particularly adapted to my nature, yet as something of necessity to be gone through, and therefore best undertaken with cheerfulness, I used to enter upon with some degree of alacrity, ...'

(26) *The Superannuated Man* P.231

- (27) *Captain Jackson* P.225 'There is some merit in putting a handsome face upon indigent circumstances. To bully and swagger away the sense of them before strangers, may not be always discommendable... But for a man to put the cheat upon himself; to play the Bobadil at home; and, steeped in poverty up to the lips, to fancy himself all the while chin-deep in riches, is a strain of constitutional philosophy, and a mastery over fortune...'

但 Lamb に於ける 'a mastery over fortune' の方法は、この様な観念的転位による情緒的充足でなくして、現実的、物質的条件の充実向上に支えられた「貧しさへの確乎たる態度から結果したものであつた。

- (28) 'There is something very touching in these old remembrances.' (*On Some of the Old Actors* P. 154) と彼は以前の俳優について語る。そして the mighty future is as nothing, being every thing! the past is every thing, being nothing!' (*Oxford in the Vacation* P.11) という言葉は、着実な忍耐の生活を歩まな

ければならなかつた彼が、未来への望みより過去の追憶の中に、現在を生きる力を見出そうとした事を意味する。

(28) *New Year's Eve* P.34

(29) *ibid.* P.32

(30) Augustine Birrell, *Obiter Dicta*
(Duckworth 1927 (first pub.1960))
P.282

(31) *The Two Races of Men* P.26

(32) *All Fools Day* PP.51-2

(33) *ibid.* P.51

(34) *ibid.* P.52